

日本労働年鑑 特集版 太平洋戦争下の労働運動

The Labour Year Book of Japan special ed.

第四編 治安維持法と政治運動

第三章 中国における日本人の反戦運動

第二節 八路軍および新四軍地区

一九三七年七月、日中戦争が勃発するとともに、中国共産党と国民党との合作協定により、中国赤軍は国民革命軍第八路軍として改編され、華北において抗日戦争に参加した。また国内戦当時華中および華南にあった赤軍遊撃隊が同年一二月同様にして国民革命軍新編第四軍に改編され、華中、華南において抗日の戦いを展開した。以下に記すのはこれらの地区における日本人の反戦活動の様相であるが、さきにみた国民党地区の状況にくらべると、中国共産党・八路軍の捕虜工作、捕虜教育はさわめて意識的、組織的であり一貫性をもっていた。これに応じて反戦運動も、八路軍や新四軍に従軍しつつ、終戦にいたるまでさまざまな方法をもって組織的にねばり強く展開された。以下の記述は主として反戦同盟記録編集委員会編「反戦兵士物語」(一九六三年九月刊)によっている。

日本兵士覚醒連盟の活動

一九三九年十一月、華北の山西省林県麻日村において、日本兵士覚醒連盟(注)が結成された。この連盟は傷を受けたりして八路軍の捕虜となった日本兵士によって組織されたもので、華北においてはじめての日本人反戦団体であり、発起人は小林武夫、高木敏雄ら七名であった。覚醒連盟宣言はつぎのように記している(同連盟発行のパンフレット「反歌」第一号——一九四〇年四月一掲載、鹿地亘「反戦資料」マイクロフィルム版第三巻所収)。

覚醒連盟宣言

日本ファシスト軍閥が暴虐なる侵略戦争を開始してより既に三歳、对中国侵略の徒らなる犠牲になりしもの百万の同胞百二十億の血涙の財のみに止まらず。重檻の囚人のそれにも勝る苛酷なる重圧に喘ぐ者独り戦場の兵士のみならず。虚偽と捏造を以って我が幾千万の同胞を翻弄し更に鮮台其の他植民地人民の窮迫の苦悩たるや実に其の極に達せり。幸ひにも一步先んじて真理を学び得る機会を得たる我々は、茲に覚醒連盟を組織し、民族自衛の為に、而して飽く迄も国際的被圧迫者解放の一貫精神に基き邁進中の正義的中国軍の援助の許に、日本軍兵士を喚醒せしめ、以って之と反戦運動上の連繫を保ちつゝ反侵略的工作の進行を加強し、云々。

(注)「名称ははじめ”めざまし”連盟とよんだ。理由は、一步さきにめざめた私たち連盟員が、その後やってくる多くの兵士たちをめざめさせる使命を背負っているという単純なものだった。しかし”めざまし”とよぶのはどうも感じがぴったりこない、ということから間もなく”覚醒(カクセイ)連盟”に改称した」(前掲「反戦兵士物語」一五四ページ)。

日中戦争勃発以来一九四四年十一月までの間、八路軍の捕虜となった日本軍将兵の数は二四〇七名に達したといわれるが、これら将兵はいうまでもなく日中戦争を「聖戦」と教育され、勝利を確信していた。そして捕虜となるのを帝国軍人の最大の恥辱として最後には自爆用の手榴弾を手に死を選べという教育を叩き込まれてきた。それが重傷をうけたりして自決しそこね、とるにたらぬ「匪賊」と宣伝されている八路軍の捕虜となった将兵の多くは、殺せと抵抗し、自殺や脱出を図り、また自

暴自棄になったり、絶望状態に陥ったが、八路軍との生活のなかで、捕虜の人間的な正当な取扱いや八路軍と中国民衆との結びつきを体験するうちに次第に考え方をかえるようになり、日本軍のやり方とひきくらべて、日本が宣伝している東洋平和の聖戦に対して疑問を抱くようになる者が生じた。捕虜の兵士で原隊復帰を望むものはすべて送りかえされたが、当初、八路軍の捕虜教育にダメされまいとし、反戦運動に従事している日本人に対しても「非国民」、「国賊」と憤激していた彼等のなかからこの戦争が侵略戦争であること、政府・軍部・財閥の手によって国民が戦争に狩りだされ犠牲を強いられていることなどを知らされるうちに、反戦活動に投じる者が生まれ、運動が組織されて行ったのである。

覚醒連盟の活動は八路軍の組織的な指導と援助のもとに行なわれ、最前線における日本軍小部隊の陣地やトーチカ内の兵士に向かって、八路軍は捕虜を優待する、兵士は侵略戦争の犠牲者だ、戦いを止めて一日も早く内地に帰ろう、などの呼びかけやビラまきを行ない、あるいは新たな捕虜兵士の世話などに従事した。

覚醒連盟の組織は、一九三九年一月華北の山西省に最初の連盟が成立してのち、四一年八月に冀南支部(河北省の南部地区)および冀魯予支部(河北、山東、河南の各省にまたがる地区)が結成された。冀南支部の支部員は当初三名で、のち一〇名となった。この他一九三九年から四二年にかけて太行、太岳、晋東南、山東の各支部が結成された。連盟支部は計六支部に広がり、連盟員数も増加した。そして一九四二年八月、この覚醒連盟は日本人反戦同盟華北連合会に組織統一された。

在華日本人反戦同盟の活動

一九〇四年五月、延安に在華日本人反戦同盟延安支部が結成された。これは中国共産党および当時延安に入った岡野進(野坂参三)の指導のもとに、捕虜となって延安に送られていた森健、春田好夫、市川常夫によって組織されたものである。反戦同盟の本部はさきに記したように重慶にあった。延安支部設立にあたっての宣言文はつぎのようである(前掲「反戦物語」八ページ)。

我々は、北支の戦線で、中国国民革命軍第八路軍のために捕虜にされた日本兵士の一部である。多くの戦友と同様に、我々もまた、北支にくるまでは、この支那事変は「東洋平和の確立」「日支共存共栄」等をめざす「聖戦」であると信じ、勇躍出征したのである。だが、戦場を馳駆(ちく)すること数ヵ月にして、我々の信念はぐらついてきた。軍部の宣伝とはまったく反対に、中日両国民の血と涙によって、日本の軍部と財閥の「楽土」が北支の地に作られている事実を、我々の目でみたのである。その後、我々は、時と場所とをことにして、八路軍の捕虜となった。同軍によって我々は敵としてではなく、兄弟として取扱われ、また種々のことを聞きするにつれて、我々の目は「聖戦」の真相をハッキリと見きわめることができた。(中略)

我々は、異国の山野に骨をさらし、寒暑とたたかい、疾病にくるしみ、日夜悪戦苦闘をつづけた。だが、このなかから我々は何をえたか？ また、銃後の国民大衆は何を得たか？ ぼう大な軍事費、増税、物価騰貴、統制につぐ統制、中小商工業者の破綻、労働の強化、農村の荒廃、抑圧と弾圧、自由と民権の剥奪。これが国民の大多数にあたえられたものだった。だが、他の一面を見よ！ 財閥は巨万の富をつくり、軍部は政治を独裁しているではないか！ これが「聖戦」の名において行なわれているのだ。(中略)

聞け！ 四億五千万の中国民衆の憤怒と怨恨の声を。見よ！ 祖国の擁護と民族の自由独立のために、老いたるも若きも、男も女も武装してけっ起せるさまを。彼らの敵は何者か？ 中国の領土をおかし、彼らの兄弟を殺戮し、彼らの平和な生活を破壊し、彼らの自由と独立をじゅうりんする日本の軍閥と財閥なのだ。彼等は、決して日本の民衆を敵としなかったし、また今後も同じ抑圧者の下にしんぎんする兄弟として、手を握ってく

れるのだ、熱く両手でしっかりと。(中略)

日本帝国主義打倒のたたかい、これこそ真にわが国民が生命をなげだしてたたかうにあたいする聖戦なのだ。これが真にわが国民と国を愛する者の任務であり、義務である。我々が今日、率先して、第八路軍の地域に、在華日本人反戦同盟支部をつくるにいたった趣旨も、じつに右の任務と義務とをはたさんがためである。支部創立にあたって、我々は中日両国民解放の聖戦のために身を捧げることを誓い、これをここに断固として宣言する。

侵略戦争を即時中止せよ！

中国全土から日本軍隊全部を即時撤退せよ！

軍部打倒、戦争政府打倒！

中日人民団結万歳！

中日人民の共同闘争万歳！

その後反戦同盟の組織は、一九四一年二月に晋察冀支部、冀中支部(河北省中部、支部員は当初六名)が成立し、四二年三月から一二月にかけて華中の新四軍地区に蘇中(支部員は当初五名)、蘇北(同六名)、淮北(同四名)、淮南(同五名)の各支部が成立した(その後この四支部の統合的指導機関として華中地方協議会が四三年五月に作られた)。この他四二年中に、晋西北、浜海、魯中、魯南、清河、膠東の各支部が成立した。また一九四三年には反戦同盟晋冀魯豫地区協議会が、同年七月には山東地区協議会が、それぞれ結成された。一九四四年には反戦同盟支部数は一七——延安一、晋西北一、晋察冀一、冀中一、太行一、太岳一、冀南一、冀魯豫一、山東五、新四軍四、となっていた(「在華日本人民反戦同盟の宣伝活動」一九四四年三月日本人民解放連盟華北地方協議会——鹿地亘「反戦資料」マイクロフィルム第三巻所収による)。

なおこの反戦同盟員のなかから一九四一年から四三年の間に、判明したものだけでも二五名の犠牲者を出した。これらは、八路軍に従軍中日本軍の銃弾にたおれたもの、あるいは日本軍隊当時の疾病が根治せず、それが再発悪化して病死したもの、などであった。

一九四二年八月延安において、華北日本人反戦団体代表者大会(全華北反戦大会)ならびに華北日本兵士代表者大会が開催された。

日本労働年鑑 特集版 太平洋戦争下の労働運動

発行 1965年10月30日

編著 法政大学大原社会問題研究所

発行所 労働旬報社

2000年2月22日公開開始

■ ←前のページ 日本労働年鑑 特集版 太平洋戦争下の労働運動【目次】 次のページ → ■
日本労働年鑑【総合案内】

法政大学大原社会問題研究所(<http://oisr.org>)
